武田泰淳著『司馬遷』小考

――父・大島泰信から示唆されたもの――

長田真紀
OSADA Maki

キーワード：武田泰淳、『司馬遷』、大島泰信、ヘーゲル、『歴史哲學緒論』

一

武田泰淳が昭和十八年（一九四三）四月に刊行した書き下ろし評論『司馬遷』[1]は、武田泰淳の名を世に知らしめることになった実質的なデビュー作である。そして、数年後には戦後派作家として開花していく武田泰淳の文学の本質、核なるものを内包している作品でもある。

私が「史記」について考へ始めたのは、昭和十二年、出征してからである。はげしい戰地生活を送るうち、長い年月生きのびた古典の强さが、しみじみと身にしみて來て、漢代歴史の世界が、現代のことのやうに感じられた。歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現實のきびしさを考へる場合に、何かよりどころとなり得るものが、「史記」には有る、と思はれた。[2]

武田泰淳は日中戦争（当時の呼称は「支那事変」。「日支事変」「日華事変」とも呼ばれた）に出征し、中国大陸で戦地生活を送るなかで『史記』の世界を体得したわけだが、それを「歴史論とも、思想論ともつかぬ、文藝評論風の風の字つきのもの」[3]として作品化していく過程には、様々な存在からの影響や示唆があったはずである。

本稿では、『司馬遷』の特色の一つである、「史記的世界

全體の持續」「空間的に構成された歴史世界」という武田泰淳の『史記』についての把握と認識に、父・大島泰信からの示唆が影響していたであろうことを考察してみたい。

二

武田泰淳は、昭和二十七年（一九五二）八月の雑誌「淨土」（法然上人鑽仰會）に発表した随筆「父子の情」[4]において、次のように記している。なお、この随筆は、武田泰淳が父の歿後、程経ずして発表したものである。

當時（昭和五年以後數年）、息子の方は非合法運動にひつかかつて捕吏のせまる所となり、狼狽憔悴、はなはだ醜態をきはめてゐて、父の苦衷を察したことがない。警察署の樓上に於て、面會の父と理論闘爭もしかねまじき勢ひであつた。父は白きハンケチをズボンのポケツトよりひき出し、無言で拘留中の子に手わたした。子は鼻をわづらつて、絶えず多量の鼻汁を流してゐたからである。怒罵もせず、泣き落としもせず、父は子が大學中途退學を決した日、ヘエゲル全集を子の机上に贈つた。

また、「朝日新聞」のシリーズ記事「ほんとうの教育者は」と問われて」の最終回である第一〇八回目（昭和四十五年十二月二十九日（火曜日）第十五面）に、「僧侶の父　生活のチエ授ける　無愛想な中にも誠意」という随筆を発表している。その中で、次のように述べている。

大学にはいったとたんに、警察につかまり、その後しばしば留置場入りをするようになってから、父はいつも必ず面会に来てくれた。鼻をわずらっていて、紙なしで困っていた私に、自分のハンカチをわたしてくれる。そんな親切な父と議論をはじめたりする私を、特高の刑事さんは「いいお父さんじゃないか。なんで反抗なんかするんだい」と、あきれ顔でしかった。

二年間の戦地生活からもどると、父は「お前の顔も少し緊張している」と批評した。

手紙は、電報のように短かった。文章を書くのがきらいで、卒業生に色紙など頼まれると、しぶしぶながら「言行一致、表裏相応」と書いてやり、その文字も、まるで字であるのをイヤがっているみたいな、ひかえ目で、けれん味のないものだった。

私の発表する文章は、ていねいに読み「お前の小説は木に竹をついだようだね」と言い、誤字なども訂正し、

しまいに友人の文章にも朱筆を入れるようになった。「芥川という人は、あまり色気のあるものは書かんな。『細雪』は少し長すぎて、たいくつする」などと意見をのべた。「これからは経済学が大切になるな」「敦煌の文献があったら、みんな買っておけ」「マルクスばかりでなく、ヘーゲルも読め」。多少、予言めいた忠告もあたえた。

武田泰淳の父・大島泰信（明治七年三月二十四日～昭和二十七年三月十八日）は、浄土宗僧侶であると同時に、大正大学教授であり、『佛教讀本』一・二巻（明治四十年五月、九月）や『浄土宗史』（大正三年一月『浄土宗全書』第二十巻に収載）の著作がある仏教学者である。

その父からの示唆によって、時期は明確には判明しないものの、『司馬遷』執筆以前の段階で、武田泰淳がヘーゲルを読んでいたことが推察できる。

昭和五十年（一九七五）七月の雑誌「海」（中央公論社）誌上で行われた、武田泰淳・佐々木基一・開高健の鼎談「混沌から創造へ」においても、武田泰淳は次のように発言している。

武田　だから本箱には堅い本ね、支那研究の本とか、経済学の本とか。

開高　ブハーリンとか……。

武田　そのときは、マルクスのほうは禁止されていたから、ヘーゲル。

開高　なるほど。一代前にさかのぼるわけだ。

武田　ヘーゲルの全訳が、ちょうど出だした頃で、船山信一とかなんとかいうのが偉い人だった。

佐々木　ヘーゲルの翻訳はまだ一部分しか出なかったですね。

武田　それと漢文や仏教のほうのむずかしい全集。つまりヘーゲルだけは読んでもいいというわけだ。

開高　ヘーゲルは許されていたんですか。

佐々木　もちろんヘーゲルはいいんですよ。

武田　だからみんなやっていたんだ。

この発言からも、武田泰淳がヘーゲルを読んでいたであろうことが伺える。先ず、このことを押さえておきたい。

三

武田泰淳は、自著『司馬遷』を、つまり武田泰淳が考える「史記的世界」を次のように構想・構成した。

自序
凡例
第一篇　司馬遷傳
第二篇　「史記」の世界構想
＊序說
Ⅰ「本紀」について
＊世界の中心
＊聖と惡
＊異樣なる個人
＊人間始皇帝
＊二つの中心
＊鴻門の會
＊高祖「本紀」と「列傳」
＊おそろしき女
Ⅱ「世家」について
＊並立狀態
＊喪家の狗
＊轉換
＊持續
Ⅲ「表」について
Ⅲ（ママ）「列傳」について
＊「伯夷」から「貨殖」まで
＊象徵的人間
＊思想の面
＊文化の運命
＊公孫弘批判
＊文學者
＊英雄豪傑（一）
＊英雄豪傑（二）
＊匈奴問題
Ⅴ結語
後記
司馬遷年譜對照表

この中で、「史記的世界全體の持續」「空間的に構成された歴史世界」が集中的に語られるのが、「Ⅱ「世家」について」に配置された「＊持續」においてである。そして、続く「Ⅲ「表」について」でもそれが補強・補完されている。

「Ⅱ「世家」について」の「＊持續」では、「史記的世界」にある「決して持續を許さない世界」、「持續と轉換の問題」を考えさせるように構成されている「世家」三十篇、「象徵的に持續し得た」者と「象徵的には持續し得なかった」者、「女がなくては」成立しえない「持續」、「持續作用をなすべき相互關係」が逆に「破壞作用をしてゐ」たり、「自壞作

用」が存在している、といった分析をしながら、次のように纏めている。

それでは一體、史記的世界に於ける「持續」とは、如何なるものであらうか？

およそ個人にしても、血族にしても、集團にしても、持續が本能である。本能ではあるが、史記的世界では、この本能をとほすのが困難であつた。しかし持續が困難なことは、「史記」では、榮枯盛衰、生者必滅的な意味、時間による變化の意味で問題にされてゐるのではない。持續が、轉換をふくむ持續であり、持續を書くことは非持續を書くことになるとは言へ、それは時の流れに詠嘆する風に、考察されてゐるのではない。持續すべきものが持續しないのを、ただ悲しむべき現象と見送るのではない。なるほど、持續を時間的に見れば、それは中斷され、轉換してゐる。持續を個別的に考へれば、すべてつひに、持續し得ないのである。だが「史記」は持續を、さうはとり扱つてゐない。史記的世界では、持續は空間的に考へられてゐる。全體的に考へられてゐる。史記的世界は、「本紀」だけ、或は「世家」だけで、出來てゐるのではない。「列傳」「書」「表」、あらゆるものを包含して、持續してゐるのである。「史記」の問題にしてゐるのは、史記的世界全體の持續である。個別的な非持續は、むしろ全體的持續を支へてゐると言つてよい。史記的世界は、あくまで空間的に構成された歴史世界であるから、その持續も空間的でなければならぬ。先にのべた、「世家」の自壞作用、相互中斷作用にしても、すべては史記世界全體の絶對持續を支へ滿すものである。これは「史記」のどの部分を讀んでもすぐ氣づくことであり、何處から讀みはじめても、結局はこの絶對持續へ行きつくのである。この絶對持續へ行きつけるからこそ、史記的世界は、眞に空間的なのである。

さらに「Ⅲ「表」について」では、

「表」によつて、世界の各部分を同時に見ることは、歴史を空間的に考へることである。歴史的世界を絶對持續に於て見、かつ考へる事と言つてよい。

とした上で、次の「Ⅲ（ママ）「列傳」について」へと続く布石として、こう述べている。

ことに「列傳」となると、むしろ持續などはあまり問題

でなく、個人出現、個性出現、象徴的主張などが問題となつて來るので、ともすれば史記的世界の絶對持續を忘れがちになる。しかし如何なる個人が何を主張し、何を象徴し、何を表現しようが、いづれも以上十表の何處かに書き込まれ、または書き込まれた事實と關係することによつて史記的世界に存在してゐるのであるから、「列傳」もやはり單なる「列傳」ではなく、絶對持續する史記空間中の「列傳」なのである。それ故、個人と世界、個人と絶對持續の問題を考へるために「列傳」を讀んでも、一向さしつかへはない。かへつてその方が、「列傳」の歴史哲學的意味が深められると思ふ。

こうした武田泰淳が頻繁に用いている「持續」「空間的」といった言葉、すなわち捉え方は、ヘーゲルが中国について講ずる中で用いていたものである。また、「歴史哲學的意味」という表現も、ヘーゲルを強く意識したものである。

ここで、ヘーゲルが中国史について、とりわけ「持續」と「空間的」という言葉を使いながら説明しているものを掲げる。武田泰淳がヘーゲルをどの書物によって読んでいたのかはわからない。しかし、おそらく執筆段階では、複数のヘーゲル関係の書籍を渉猟したであろうと考えられる。ここでは、武田泰淳が東京帝国大学を正式に退学した昭和七年（一九三二）三月三十一日[5]の時点において刊行され入手できた書籍の中から、昭和六年三月に発行された河野正道訳　ラッソン版『歴史哲學緒論』（ヘーゲル著作集第一巻　白揚社）の「世界史の區分」（三八八頁～三八九頁）から挙げることとする。[6]

故に、そこに現存してゐるものは、先づ第一に、未だ主觀がその中でその權利を認められるに至らないで、一つの直接的な、無法律的な人倫がより多く支配してゐる國家である。それは歴史の幼年期である。此の形像[ママ]は二つの方面に分裂する。その第一は、家族關係に基づいてゐる國家、訓戒と懲罰とに依つて全體を團結させる父親の配慮の國家、――茲には未だ對立や觀念性が現はれてゐないので――一つの散文的な帝國である。それは同時に持續の帝國である。それは自ら自己を變化させることが出來ない。これが後方アジアの形像[ママ]、本質的に支那帝國の形像[ママ]である。――他面に於ては、此の空間的な持續に時間の形式が對立してゐる。諸々の國家は自己の内部又はその原理に於ては變化しないが、無限の相互的な變化、休みなき抗爭を續けて、以つて彼等の急速な沒落を準備してゐる。その國家が外部に向けられてゐる時は、個體的原理の豫覺が現はれて來る。鬪爭と抗爭とは一つ

の自己集中、自己内包括である。だが、此の豫覺は、寧ろより多く無力な、無意識的な、自然的な豫覺としてのみ現はれ、――光として現はれてゐるが、その光は未だ自己知識的人格の光ではない。此の歴史そのものも亦未だ主として沒歴史的である。何となれば、その歴史は單なる同一の壯嚴な沒落の反覆（ママ）に過ぎないから。勇敢や力や義俠に依つて以前の莊麗（ママ）であつたものにとつて代る新しいものも、以前と同じ衰微と沒落との循環を繰り返す。故に、此の沒落は眞實の沒落ではない。何となれば、悉ゆる此の種の休みなき變化に依つても、何等進歩が行はれないから。一つの沒落したものにとつて代る新しいものも亦、沒落者の中に沈淪して行く。茲には何の進歩も行はれない。此の不安は一つの非歴史的歴史（eine ungeschi（ママ）chtliche Geschichte）である。

（傍点原文のママ）

ヘーゲルは、世界の歴史を思考によって哲学的に考究しようとした。そして、世界の歴史は、世界精神の発展過程、つまり理性や自由の発展過程として捉えるべきものと考えていた。それは、中国、インド、ペルシャといった東洋世界から、ギリシャ世界、ローマ世界を経てゲルマン世界へと行きつくものであった。

ヘーゲルにとっては、歴史とは変化すべきもの、発展すべきものであった。ところが中国は、ヘーゲルが考える歴史の法則――歴史とは変化し発展するものである――からは大きく逸脱していた。中国は、革命によって王朝が変わっても、それは単に為政者が変わっただけ、表層的な現象が変わっただけにすぎず、社会構造も機能も何ら変わらない。本質的に変わることが全くない。

それ故、ヘーゲルは中国を「持續の帝國」と呼んだ。そして、その「持續」とは「空間的な持續」であるとしたのである。

武田泰淳の『司馬遷』における「史記的世界全體の持續」「空間的に構成された歴史世界」という『史記』の捉え方は、明らかにヘーゲルの中国史観を援用している。しかし、ヘーゲルがそれによって中国を「歴史の幼年期」「非歴史的歴史」と否定的に論じたのに対し、武田泰淳はおおいに肯定し評価しているのである。

四

武田泰淳は、「鴻門の會」について述べながら、次のように語っている。

「鴻門の會」の面白さは「事件」などといふ、偶然的な時間的な點にはない。必然的な空間的なつながりの面白さ、一つ一つの天體の動きが、大きな宇宙の運動をかたちづくってゐる、あの精齊な「全體」の面白さである。この面白さは「史記」の面白さである。司馬遷の歴史の面白さである。人間天文學の面白さである。一人一人の個性、一つ一つの行爲が、かうして整齊な「全體」にむすびつけられて行くのは、面白いばかりでなく、歴史「眞實らしさ」ともなるのである。

武田泰淳にとって、「「史記」の面白さ」「司馬遷の歴史の面白さ」は、中国の歴史の面白さ、中国全体の面白さと同じものではなかったろうか。

昭和十二年（一九三七）七月七日、盧溝橋事件をきっかけに「支那事変」（日中戦争）は始まった。武田泰淳自身も、昭和十二年十月十六日に応召し、昭和十四年（一九三九）十月一日に召集解除となるまで、兵士としてそこに加わっていた。軍は「支那事変」を聖戦と称したが、戦線は拡大長期化し泥沼化していった。そして、国家が「大東亜戦争」と呼ぶ[7]世界大戦へとなだれ込んで行ったのである。

武田泰淳は「結語」の中で、

史記的世界はおそろしい。眞實だからおそろしい。だから棄てては置けぬのである。

と記した。

ここもまた、中国的世界のおそろしさ、中国のおそろしさ、と置き換えてみることも可能だろう。

「大日本帝国」が、中国との長い歴史や黄河・長江文明に関わる深い文化の影響を忘却し、無邪気に、身勝手に、身のほど知らずに、無謀に、「支那事変」から「大東亜戦争」へと戦争を挑んでいる最中、武田泰淳は司馬遷という歴史家の魅力と、「史記的世界」の「面白さ」「おそろしさ」を遺憾なく綴っていった。そこには、世界で最たる分厚い歴史を有し、びくともしない「空間的」「持續」をする中国（ヘーゲルの言でもある「持續する帝國」支那）の魅力と「面白さ」、そして、日本人が決して侮ってはならない中国の「おそろしさ」（敬意を含めた畏怖）を、実は潜ませていたのではあるまいか。惨めな中国、汚い中国、遅れた中国、幼稚な中国、かわいそうな中国、憐れむべき中国などではない、中国の「おそろしさ」を。

父・大島泰信自身はヘーゲルの歴史観をどのように考えていたのか、息子・武田泰淳との間でヘーゲルについて何

か議論は交わされたのか、司馬遷や『史記』、そして中国に対してどのような考えを持っていたのかなど、興味は尽きない。司馬遷が父・司馬談の精神を背負っていたように、もしかしたら、父・大島泰信の考えを武田泰淳が何か受け継いでいたかもしれない。

優れた文学作品であればあるほど、そこにはさまざまな様相が描き込まれる。本稿で論じた問題は、その一つの姿である。

ともかく、父・大島泰信による「ヘーゲルも読め」という示唆は、武田泰淳が傑作『司馬遷』を生み出す重要なきっかけの一つになったであろう。

（注）

（1）東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年三月三十日第一刷印刷　同年四月五日　第一刷発行（三〇〇〇部）日本評論社

なお、本稿の引用はこの版に拠るものとする。仮名遣いはもちろん、旧漢字も可能な限りこれに従った。

（2）前掲（1）の「自序」

（3）前掲（1）の「自序」

（4）掲載誌の表紙（目次）では、タイトルが「父と子」となっている。

（5）拙稿「武田泰淳の軌跡――中央郵便局事件とその揺曳――」（二松學舍大学大学院紀要「二松」第七集　平成五年三月）において論じた。参照されたい。

（6）鈴木權三郎訳　『歴史哲學』（ヘーゲル全集第十巻　岩波書店　昭和七年十二月）の「區分」（一八九頁～一九一頁）もまた、同様の該当箇所である。

（7）昭和十六年（一九四一）十二月十二日、東條英機内閣の閣議決定で、「今次ノ對米英戰爭及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルヘキ戰爭ハ支那事変ヲモ含メ大東亞戰爭ト呼称ス」とされた。